

# 言語の問題としての「前提」

## ——研究の現状と問題——

西 村 淳 子

### 1. 序

「前提」という現象は、G. フレーゲがはじめて取り上げて以来、ラッセル、ストローソンなどによって論理学の問題として論じられた。一方、言語学においても、「記号と現実の対応」に基づく単純な意味論の限界が見極められ、話し手、聞き手の現実を考慮した語用論の視点が導入されると、意味、機能、効果などと呼ばれる言語の働きの多様な在り方が問われるようになった。このような「記号—現実—使用者」を結ぶ広い意味における言語現象の一つとして、今、言語学においても前提の問題が問われている。しかし、前提がどのような形で言語に現れるかはまだ十分に把握されていない。これまでの論の多くは出発点における論理学の拘束をそのまま受け継いでおり、言語の問題としてこの問題の全幅を捉えるまでには到底至っていないのである。そこで本稿においては、まだ言語学において問われ始めたばかりのこの前提という現象を言語の角度から捉えるために、研究の現状を紹介しつつこの現象にとって本質的な問題は何かを考えてみたい。

### 2. 前提研究の出発点

現在の言語学における前提研究はG. フレーゲの研究から出発している。フレーゲの説明によると、「ケプラーは悲惨な死を遂げた」という文において、

「ケプラーという名詞が何かを指示している」という事柄は、その文の意義<sup>(1)</sup>に含まれているのではなく前提されている。なぜなら、この文を否定すると、「ケプラーは悲惨な死を遂げなかった」となり、「ケプラーは悲惨な死を遂げなかったか、あるいは、『ケプラー』という名前は意味をもたない」とはならないからである。つまり、命題を否定しても同時に否定されてしまわない推論を前提と呼んだのである。ラッセルはフレーゲのこのような見解を認めず、確定記述（例えば「フランスの王様は禿だ」という命題における「フランスの王様」）によって表現されるものが存在することは、命題の断定するところに属すると考えた<sup>(2)</sup>。こう考えることによって、ラッセルは命題の「意義と意味」の二性をできるかぎり排除し、一元的な論理空間を設定しようとした。これに対し、ストローソンは、「フランスの王様」（つまり、確定記述）の指示機能は、記号の意味ではなく、使用に関する問題であり、指示物の存在は断定されているのではなく、前提されていると考えた。結果的にストローソンはフレーゲの指摘した言語の二つの働き「意義と意味」とほとんど同様の区別、言語の意味と使用の区別を主張することになった<sup>(3)</sup>。

このような論理学の議論から出発した前提研究は、言語学に導入されてからこれに関わる多くの言語現象を発掘した。しかし、多くの現象が問題にされるに従って、前提現象と呼びうるものにも多様性があることが明らかになり、前提とそれ以外の現象との境界をこれまで以上に明確にする必要が生じた。そこで次章において、前提がこれと混同されがちな現象との区別においてどのような性質を持っているかを検討する。そしてそのつぎに、前提現象自身の多様性を、現象の分類を通じて明らかにしていく。

### 3. 前提とその他の現象

過不足のない前提の定義を与えることは、現在の前提研究にとっては出発点というより到達すべき目標である。前提のように言語活動に関与しながらも表

面化されない現象が言語学の問題として扱われるようになってからまだ日が浅いのである。したがってここで一挙に前提の定義から出発することはできないので、前提という現象がこれまで比較されてきたその他の現象、すなわち、断定、意味的含意、ほのめかし、会話の含意などの現象とどのように異なっているかを考察しつつ、前提という概念で捉えるべき現象をできるだけ限定していきたい。

### (1) 断定 (assertion)

断定とは、話者が言語行為を遂行する上で談話が果たす役割、効果（発語内効力 *force illocutoire*）<sup>(4)</sup> の一種であり、命題内容を真であることとして提示することである。ラッセルの分析では、「フランスの王様は禿だ」という命題において「フランスの王様が存在する」ということは断定されていると見做される。したがって、今日のようにフランスに王様が存在しない場合には、実際にフランスに王様がいてその王様は禿ではない場合と同様、この命題は偽ということになる。これに対し、ストローソンは、この文はフランスの王様が存在することを前提として、その王様が禿であることを断定していると主張した。たとえフランスに王様がいなくても、この文は偽になるわけではなく、この文の真偽を問うことができなくなるのである。二人の解釈の違いは、前者が「フランスの王様」という確定記述によって表されたものの存在を、「... は禿だ」という述定と同一レベルの事柄として捉えようとしたのに対し、後者は確定記述の指示機能を言語の使用の問題として、述定されている事柄と区別した点にある。この議論は論理学においてもまだ結論が出たわけではないが、言語学的な見地からすると、言語の使用と意味とを区別するストローソンの立場の方が我々の日常言語に対する意識に近く、言語事象の説明にとって生産的であると思われる。断定とはあくまで話者が明示的表現を用いて行う言語行為であり、言表がその行為の証拠となる。つまり、聞き手が話者の言語行為を解釈できるのは談話が存在するからである。どのような言語行為も世界の多くの事柄や、状況、文脈などの知識に基づいて行われるが、特定の言語行為を行う際にこれ

らの知識がすべて動員されるわけではない。話者がどのような知識を念頭において言語行為を行ったかということは、結果的に発せられた談話から知ることができない。したがって、行為の証となる言表内容に裏付けられた断定という効力と、そのような明示的な表現に支えられていない前提とを同一レベルに置くことは、言語学的には非生産的なことであると考えられる。

## (2) 意味的含意 (implication sémantique)

意味的含意は次のように定義できる。

「AがBを意味論的に含意する (semantically entails) (A ⊢ B と書き表す) のは、A が真となるどの状況においても B が真となると、およびそのときに限られる。(言い換えれば、A が真であるあらゆる世界で B もまた真である。)」<sup>(5)</sup>

たとえば、

例(1) — Pour en revenir aux enfants, je suis leur mère, et rien d'autre. *Radioscopie*, Simone VEIL, p. 289)

上の文、「私は彼らの母親である」という文は「彼らは私の子供である」ことを意味的に含意している。前者が真となるどの状況においても後者は真だからである。しかし、前者は後者を前提するわけではない。なぜなら、「私が彼らの母親ではない」とすると、「彼らは私の子供である」は真であるとは限らないからである。前提には、意味的含意を用いて導くことができるものとできないものがある。例えば、状態変化動詞の前提(「煙草をやめる」ためにはそれまで煙草を吸っていなければならない)などは、意味的含意によって導かれる。しかし確定記述が指示対象の存在を前提にするような場合、意味的な含意関係はない。

## (3) ほのめかし (sous-entendu)

ある言表から引き出すことのできる推論のなかに、前提とほのめかしを区別しようとしたのはデュクロである。デュクロによると、Pierre a cessé de fumer<sup>(6)</sup> という文は、(a)「ピエールは現在煙草を吸っていない」ことを措定し、(b)「以前煙草を吸っていた」ことを前提している。しかし、その上に(c)

「少し努力すれば煙草はやめられる」ないし「ピエールは君より意志が強い」ことなどを伝えることもある。前提を他の現象から区別するためのもっとも基本的なテストである否定文への変形を行ってみると、この文が(b)「以前煙草を吸っていた」ことを前提にしているが、(c)「少し努力すれば煙草はやめられる」ないし「ピエールは君より意志が強い」などは前提とはいえないことが分かる。デュクロの初期の分析<sup>9)</sup>は、前提を意味的構成素としてラングに属するものとし、ほのめかしを修辭的構成素として言語行為に帰属するとした。しかし、本人がこの見解を見直し、前提も言語行為、とりわけ発語内行為の一種と考えるようになる。とくに興味深いのは、前提を他の推論と区別するためのクラシックな基準、否定文または疑問文への変形には適用の限界があることを指摘した点である。つまり、ラングに属する文を変形することはできるが、使用された言表(énoncé)を変形することは無意味なことなのである。そこから、談話の連続性(enchaînement)がもう一つの基準となりうることを示唆した。談話は、前提に対してではなく、指定された事柄に対して連続していくというのである。この基準に基づいて前提とほのめかしを特徴づけると、「私がXを前提するということは、自分の言葉によって聞き手にXを受け入れることを強いながら、しかも彼にはXに関して対話を継続する権利を与えようとしなくてよいことである。」<sup>10)</sup>これに対して、ほのめかしは「なぜそのような言語行為を行うのか」という問に対する答えとして聞き手が発見する言語行為の「イメージ」である。

デュクロの前提とほのめかしの区別は重要であるが、筆者の考えでは、デュクロもまた明示的な表現を用いて行う言語行為と、明示されていない前提とを混同しているように見える。言表の存在が話者の言語行為の証となり、聴者の解釈活動の根拠となる。しかし、前提された事柄は明示的に表現されているわけではない。言表の前提する事柄を話し手が考慮している場合もあれば、していない場合もある。聞き手も前提を導き出すためには、通常の談話解釈に加えて、別の事が談話に関与していないかを問わなければならない。前提とは、このよ



うな一種のメタ談話解釈によって初めて明らかになるものなのである。デュークロ自身も指摘するように、通常の対話が行われているときに前提は問題にならない。指示対象が存在せず、談話が解釈不可能なとき、あるいは、それ以上に特定の事柄が関与しているかどうかを問題にする理由のあるときにのみ前提は表面化する。したがって、前提を表現内容に直接関わる言語行為である発語内行為の一種と考えるのは、言語行為を無限定に広げてしまう恐れがある。

#### (4) 会話の含意

会話の含意とは、協調的な会話が成立するための一般的な条件となる事柄である。これを H. P. グライスは 協調の原則 と呼び、4つの原理に明文化した。これらの原理は言語学においても語用論の主要な概念として広く知られているので、ここで詳しい説明は省くが、①本当であると信じていることを言う（質の原理）、②必要な情報はできるだけ提供し、しかも必要以上のことは言わない（量の原理）、③状況に関連したことを言う（関連性の原理）、④曖昧さを避け、明瞭に言う（様態の原理）の4つである。明示的な言表の意味から考えると一見関連がないように見える対話も、対話者達がこれらの原理に従っているものと見做すことによって一貫した解釈が可能になることがある。また、現実の言語の解釈と論理的に可能な解釈に隔たりがあるような場合にもこれらの原理が関わっていることが多い。これらの原理にのっとって推論される事柄は破棄可能である（すなわち、話者がこれらの原理に従わないことがある）という点で前提と似ている。しかし、会話の含意はあらゆる談話に共通に貫かれている原理であるのに対し、前提は特定の表現に結び付いている。会話の原理が談話解釈に働く様々な要因のなかで最も普遍的に働く原理であるのに対して、前提は個々の言表、個々の発話に固有なものであるといえる。

## 4. 前提の分類

前章において、前提という現象を他の言語現象との相違において検討して

きた。つぎに前提が言語においてどのように現れるのかをフランス語のテキストの例を引いて考察する。前提という名のもとにこれまで問題にされた現象は必ずしも均質ではない。むしろあまりに多様なためにそれぞれの性質を的確に把握するには至っていないのが現状である。ここでは少くとも分類によって各々のタイプの性質が浮かび上がるように、分類基準に一貫性を持たせるよう努力した。また、前提研究のほとんどが文脈を持たない文例を用いて論じられているが、筆者は前提という現象にとって、談話の構成する世界<sup>9)</sup>は極めて重要であると考えてるので、以下の例はすべて実際に行われた談話から引用した。実際、我々が言語を使用するとき、抽象的な文からその状況を想像するのではなく、特定の状況において、特定の文脈を頭においてその談話を解釈する。言語活動の研究にとって大切なのは、そのような状況における話者や聴者の活動であり、無限に広がる論理的な可能性を追究することではない。

前提は表現内容の意味的連関から推論されるものと、そのような内容をもった談話を行う行為の連関から推論されるものと大きく分類される。前者は、どのような事柄も世界において様々な事柄と関連をもちつつ成立していることから、下に挙げたこと以外にも限りなく拾い出すことができるであろう。したがって前提研究にとって本当に興味深いのは後者であろう。語られる世界と話し手、聞き手の世界との接点が典型的な形で現れるからである。各例が前提していると考えられる事柄を簡単に括弧内に示したが、もちろん前提内容は明示されていないので、前提内容の特定に用いた表現の詳細に重要性はない。

## I. 意味的連関による前提

### a) 状態変化動詞

例(2)—Conservatoire, Comédie-Française que j'ai *quittée* pour aller avec Gérard Philipe dans la troupe de Jean Vilar... (*Radioscopie*: Jeanne MOREAU, p. 168) (コメディ・フランセーズにいた)

### b) 反復語

例(3)—Après, ma mère *s'est remariée* et mes rapports avec mon beau-père ont été beaucoup moins faciles. (*Radioscopie*. J. P. SARTRE p. 220) (私

の母は以前結婚していた)

c) 時の副詞節

例(4)—*Avant même le départ pour l'armée de son mari*, Catherine Camus est revenue à Alger avec ses deux enfants. (*Album Camus*, nrf. p. 14)  
(夫は軍隊に入った)

## II. 言語行為の連関による前提

### ①存在の前提 (表現されたものが存在することの前提)

a) 確定記述

例(5)—On vous pardonne mal d'entrer dans *le royaume gardé de la philosophie*. (*Radioscopie* : Jacques MONOD, p. 187) (哲学という踏み込んではない王国が存在する)

b) その他の指示表現

例(6)—*M. Seguin* n'avait jamais eu de bonheur avec ses chèvres. (DAUDET, *Lettres de mon moulin*, p. 36) (スガンさんという人物が存在する)

### ②事実の前提

a) 叙述的動詞 (目的補語の内容が真実であるという前提を含む動詞)

例(7)—Ils *s'apercevaient* brusquement qu'ils étaient des étrangers l'un pour l'autre, et ils se surveillaient. (R. ROLLAND, *Jean-Christophe*, t. 1, p. 155)  
(お互いに知り合っていないこと)

例(8)—Il *n'ignorait* pas que, le cas échéant, malgré son affabilité, Sun n'hésiterait pas à l'abandonner ; ... (A. MALRAUX, *Les conquérants*, p. 86)  
(愛想は良いが孫<sup>ソン</sup>は必要とあらば彼を見捨てること)

b) 非制限的關係詞節

例(9)—De même, toutes proportions soigneusement gardées, le doute cartésien, *qui est méthodique*, ne suffit pas à faire de Descartes un sceptique. (A. CAMUS, *L'Été*, p. 131) (デカルトの懐疑は方法的なものである)

### ③反事実の前提

a) 却下条件節

例(10)—*Si vous aviez vu leur maison de ce temps-là*, elle vous aurait fait peine. (DAUDET, *Ibid.*, p. 272) (その頃の彼らの家を見ていない)

### ④その他の話者の判断の前提

a) 含意動詞 (補語の表す行為に対する話者の判断を含む動詞)<sup>69)</sup>



例(11)—Enfin, après avoir tiré la langue et usé cinq ou six brouillons, il *réussit* à écrire, en lettres difformes qui s'en allaient dans tous les sens, et avec d'énormes fautes d'orthographe : (R. ROLLAND, *Ibid.*, p. 158) (書くことは難しい)

例(12)—Aucun homme n'a *jamais osé* se peindre tel qu'il est. (A. CAMUS, *Ibid.*, p. 130) (自分をありのままに描くことは大胆なことである)

b) 疑問

例(13)—J. C.-A quel âge, à quel moment veut-on le pouvoir? (*Radioscopie*, Jean LECANUET, p. 196) (人はある年令, ある時に権力を欲するものだ)

c) 単純過去

例(14)—Le dieu Gaō *vint* un jour de la Chine rendre visite au dieu Niō du Japon, dans l'idée de comparer leur force respective. (K. YANAGITA, *Contes du Japon d'autrefois*, trad. fran. G. SIEFFERT, p. 157) (語られた事柄が語る状況と切り離された現実である)

⑤対人関係の前提

a) (tuとの対立における) vous

b) puisque

例(15)—J. C.-*Vous* avez tout de même pu poursuivre vos études, *puisque* vous êtes agrégé de l'Université. (*Radioscopie*. Max-Pol FOUCHET, p. 36)  
(相手が目上または, ある程度距離のある人である)  
(*puisque* 以下の理由を聞き手も了解している)

⑥話者の身体の前提

例(16)—Il y a un petit clocher à tour carrée.

-Au milieu?

-qui s'élève plutôt excentré.

-Vers la *gauche* ou la *droite*?<sup>(6)</sup>

(話し手の身体が描写対象と一定の空間的関係を持っている)<sup>(6)</sup>

## 5. 前提の基本問題

以上, 前提をその周辺現象との比較・分類を通して考察してきた。ここでの現象の特性を前提現象の基本問題を考えながら考察しておこう。

### (1) 前提内容と前提行為

どのような事柄も周辺の世界、あるいは言語活動の状況、文脈などと密接に関係している。そしてこれらの関係に対する我々の認識には多かれ少なかれ共通性が認められる。したがって、我々は談話の内容からその前提をある程度客観的に指摘することができる。(もちろん、一つの談話に前提されている全てのことを枚挙し尽くすことは不可能である)しかし、談話に前提が認められても、話者がこれを前提したとはいえない。談話に関わる全ての事象を話者が念頭において言語行為を行っているとは考えられないからである。「言われた事」が「言うという行為」の証拠になると同じような仕方で、「前提された事」は「前提という行為」の根拠にはならない。一言でいうと、前提という行為は共通主観的な行為ではないのである<sup>40</sup>。したがって、談話の存在は聞き手に前提の解釈を要求しない。聞き手が前提を問題にするのは、「フランスの王様は禿である」といわれてもフランスに王様がいない場合のように、通常解釈が成立しない時、あるいは、特定の事柄が談話の内容に関わっているかどうかを問うメタ言語活動を行使したときなどいわば特別の場合なのである。つまり、前提内容は前提行為の結果ではなく、話者が好むと好まざるとに拘わらず談話が必然的に関わってしまう世界との関係であるといえる。

### (2) 何が前提されているか

前提の分類を通して気付くことは、談話に前提されている事柄の分類は、まさに談話が関係する異なったレベルの現実の分類であるということである。意味的連関によって導かれる前提は、談話の表現する事が一般的な世界とどのように関わっているかを示している。また、言語行為の連関によって引き出しうる前提は、言語行為と世界との関係(存在、真偽の前提)、話者と談話の関係(判断の前提)、話者と聴者の関係(対人関係の前提)、聞き手と談話の関係(puisque など)を映している。したがって、前提の研究はこのような関係が言語行為を成立させるためにどのように働いているかを示唆するものである。

## 6. むすび——今後の研究の展望——

本稿では前提という現象の在り方をできる限り忠実に浮かび上がらせるために、いわば外側（他の世界との比較）と内側（現象の分類）の両面から検討した。この考察を通じて、前提という行為が共通主観的な行為ではないこと、前提内容が談話と世界の関係の多様な在り方を示していることなどが明らかになった。しかし、前提現象を十全な形で捉えるには、検討の途中でも示されたいくつかの点を今後も発展させていく必要がある。最も重要な点は、前提の基準を談話の連関の様態によって示せないかという点である。デュクロやカットも指摘しているように<sup>6)</sup>、否定文への変形というテストには適用の限界がある。出発点における論理学の枠組みを越えるには、肯定命題を扱うだけではなく、疑問、命令など様々な形式の文を考察しなければならない。また、実際の談話に即して分析を行えば、肯定文ですら否定すると全く解釈不可能になってしまうことが多い。否定変形の適用範囲は想像以上に狭いのである。談話の連関の研究はおそらくこの問題を解決する糸口を与えてくれるであろう。実際に行われた談話のなかで、前提がずれたり破棄されたりして表面化する場合における談話の連関が、通常では明示されない前提の在り方に光りを当てることになる。しかし、この問題は今後の研究に委ねなければならない。

### 注

- (1) フレーゲの用語では「思想」「Gedanke」。「フレーゲ哲学論集」, p. 49.
- (2) RUSSEL, B. —On denoting.
- (3) STRAWSON, P. F. —*Logico-linguistic papers*.
- (4) 西村淳子—談話構成の諸相—「談話分析の方法と問題—」, p. 119.
- (5) レビンソン—「英語語用論」, p. 214.
- (6) DUCROT—*Le dire et le dit*, p. 33.
- (7) DUCROTの初期の分析とは“Présupposés et sous-entendus”, in *Le dire et le dit*, pp. 13-31. その後の見直しとは, “Présupposés et sous-entendus (réexamen)”, *Ibid.* pp. 33-46.

- (8) DUCROT—*Le dire et le dit*, p. 45.
- (9) 西村淳子—「談話構成の諸相—談話分析の方法と問題—」, p. 111.
- (10) KARTTUNEN, L. —Implicative Verbes.
- (11) NISHIMURA, J.—*Langue et Langage : Manifestation de l'observateur dans la description spatiale*, appendice p. 8.
- (12) 西村淳子—「空間記述における観察者の表現について」.
- (13) 前提が破棄可能であるということも前提が発語内行為のように共通主観的な行為ではないということに関連している。LEVINSON, S. C. —*Pragmatics*, pp. 186-191.
- (14) KATZ, J.-J. —On Defining “Presupposition”.

#### 参考文献

- DUCROT, O. —*Le dire et le dit*, Minuit, 1984.
- フレーゲ, G. —「フレーゲ哲学論集」, 藤村龍雄訳, 岩波書店, 1988年。
- KARTTUNEN, L. —Implicative Verbes, *Language* vol. 47, pp. 340-358, 1971.  
—Presuppositions of Compound Sentences, *Linguistic Inquiry*, pp. 169-193, 1973.
- KATZ, J.-J.—On Defining “Presupposition”, *Linguistic Inquiry*, pp. 256-260, 1973.
- KEENAN, E. L. —On Semantically Based Grammar, *Linguistic Inquiry*, pp. 413-461, 1972.
- KEMPSOON, R. M. —*Presupposition and the delimitation of semantics*, Cambridge University Press, 1975.
- LEVINSON, S. C. —*Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.  
—「英語語用論」, 安井稔, 奥田夏子訳, 研究社出版, 1990年。
- NISHIMURA, J. —*Langue et Langage : Manifestation de l'observateur dans la description spatiale*, thèse pour le doctorat de 3ème cycle présentée à l'Université Paris V, 1984.  
—「空間記述における観察者の表現について」, フランス語フランス文学研究, no. 47, 日本フランス語フランス文学会, p. 98-107, 1985.  
—「談話構成の諸相—談話分析の方法と問題—」, 名城大学人文紀要第39集 (24巻 2号), pp. 111-129, 1989.
- RUSSEL, B. —On denoting, *Logic and Knowledge*, Essays 1901-1950, ed. by R. C. MARSH, George allen & Unwin, 1977.
- STRAWSON, P. F. —*Logico-linguistic papers*, Methuen & Co. Ltd., 1977.
- WILSON, D. —Presuppositions on Factives, *Linguistic Inquiry*, pp. 405-410, 1972.

(名城大学理工学部講師)